

## 1920年代前後における日韓比較説話学の展開 —高木敏雄、清水兵三、孫晋泰を中心に—

金 広植\*

はじめに

20世紀に入り高木敏雄（1876～1922）、南方熊楠（1867～1941）などによって本格的に展開された比較説話学は、1920年代に孫・晋泰（1900～1960年代中半か）、鍾敬文（1903～2002）らによって、東アジアへと展開されることになる<sup>1</sup>。

柳田国男（1875～1962）とともに『郷土研究』を編集した高木は、まだ確立されていない新しい学問＝民俗学に関心を持ち1904年に『比較神話学』を刊行した。高木は、1912年末に「日韓共通の民間説話」（『東亜之光』7-11、7-12、1912年）を発表して日韓比較説話論を本格化させた。重要なのは、高木の説話論は、近代学問として成立しており、既存の国学論者の研究とは明確に区別されるものであった。高木は植民地期に日韓説話を論じながらも

日韓共通の民間説話の存在は、両民族間の文明史的関係の密接であったことの証拠にはもちろんなるけれども、人種学上のある問題の解決に対しては、必ずしも常に有力な材料とはならない<sup>2</sup>。

と指摘した。高木は文明史的観点から説話の起源と伝播に強い関心を示したが、説話の類似性を以て人種的同源（「日鮮同祖」）を論じる飛躍的イデオロギーを否定・警戒したということで高く評価できる。

「日韓共通の民間説話」を読めば、高木は高橋亨（1878～1967）の朝鮮「民間説話」（以下、説話と略記<sup>3</sup>）集に大きく依存していることが分かる。高橋は、早くから朝鮮説話に注目して1910年9月に『朝鮮の物語集 附俚諺』（日韓書房、1914年6月増補版『朝鮮の俚諺集 附物語』）を出し、大きな影響を及ぼした<sup>4</sup>。朝鮮語が出来ない高木にとって、高橋の資料集は大きな刺激になったと思われる。しかし、後述するように高木は多様な経路から朝鮮説話を採集したと思われる。筆者は、近代日韓比較説話論の始まりを究明するためには、まず近代初期に刊行された「日本語朝鮮説話集」を検討する必要があると考え、多くの新資料をまとめてその内容を分析している<sup>5</sup>。特に1910年代までの初期資料集は、その後の資料集にも一定の影響を及ぼしたと思われる。そこで、初期の資料を重点的に調査する中で、高木敏雄が朝鮮説話集を刊行したことを確認できた。

管見の限り先行研究では、高木が朝鮮説話集を刊行したということは言及されていない。そこ

---

\*横浜国立大学非常勤講師

で本稿では、高木の朝鮮説話集を検討し、説話提供者清水兵三（1890～1965）との関わりを検討し、清水の重要性を浮き彫りにしたい。また、朝鮮民俗学の成立者と評価される孫晋泰における朝鮮説話採集及び比較説話論の展開を検討することにより、1920年前後における三者の関わりを復元し、初期日韓比較論の多様な展開を検討したい。

## 1 初期日本民俗学と朝鮮説話

『韓国説話の類型』（一潮閣、1983年）の著者曹喜雄<sup>チョウキウウ</sup>は、漢文をはじめ、西欧文と日本語で書かれた説話集に関する書誌をまとめてきたが、特に日本人の論考について次のように言及している。

20世紀初めにおける説話研究の相当部分が日本人によって先導された。今日まで日本語で書かれた韓国説話の関連資料は数え切れないほど多い。その中には、研究の目的が日本強占期の統治のための方便として行われたにせよ、それとも学者的良心による純粋な比較研究という視点から書かれたにせよ、論ずるべき論著が相当多い<sup>6</sup>。

権赫<sup>クワンヒョク</sup>は、朝鮮総督府の『朝鮮童話集』（大阪屋号書店、1924年）と高橋亨の『朝鮮の物語集附俚諺』（日韓書房、1910年）などの研究と共に、今日まで貴重本として一般に公開されていなかった『花溪朴英晩の朝鮮伝来童話集』（韓国国学振興院、2006年、初版は1940年）を公刊し、荅宜麟（崔仁鶴翻案）『朝鮮童話大集』（民俗苑、2009年、初版は1926年）などの植民地期の説話集を検討した。権は「近代初期、日本学者らの採集した韓国説話が及ぼした影響を体系的に研究してこそ、初期韓国口碑文学史を正しく記述できる」と指摘している<sup>7</sup>。以上の指摘通り、数多い植民地期日本語資料の書誌を明らかにし、その功罪を位置づける作業が求められる。朝鮮説話研究は植民地期に日本人によって本格的に行われ、その後の朝鮮人の研究にも刺激を与え、一定の影響あるいは反発をもたらしたと考えられるからである。

日韓古代史・神話学者として名高い三品彰英（1902～1972）は、1960年に発表した論考「朝鮮民俗学—学史と展望—」の中で、次のように規定している。

朝鮮人学徒は、古来この種の学問にはあまり関心を持ってこなかった。それは、慕華思想・文化的事大主義が自国文化に対する学問的関心を稀薄<sup>きはく</sup>ならしめたことに遠因するものであろう。そうした事情から朝鮮民俗の研究は主として日本の民俗学界に待つほかはなかったのであるが、しかしそれは期待はずれであった。これまで内地の民俗学者たちは、一国民族学的な考え方を墨守<sup>ぼくしゆ</sup>してか、あるいは言語上の障壁も加わってか、朝鮮海峡をその学問的フィールドの限界としたようであって、朝鮮よりも遠い沖縄の島々へ渡り、一時学界に琉球ブームを起こした探訪者たちも、一葦帯水のこの海峡を越えようとはしなかった。（中略）朝鮮民俗研究を展望するとき、今一つの、そして最も顕著な特色は、その資料文献の主要なもの

が総督府および地方諸官庁の調査事業の成果として公刊されたものであるということである。(中略)今にしてこれを顧みるとき、総督府のこの種の事業が政治的にのみ偏せず、学究的な側面を持っていたことを多としなくてはならない(強調は筆者)<sup>8</sup>。

上記の三品の論考は、考古学や歴史学に比べて「一国民俗学」は伝播と交流の諸問題に関心がないことを批判しているものであり慎重な分析が求められるが、その主な主張は三つにまとめることができる。<1>朝鮮人民俗学者は少なかった、<2>日本人の朝鮮民俗研究者は少なかった、<3>朝鮮総督府資料は学究的な側面を持つと、三品は主張している。<3>については、韓国の民俗学界でも多くの論争が続いており<sup>9</sup>、植民地学知の複合性をも踏まえた議論が求められる。この論争のどちらの側に立つとしても、朝鮮総督府資料に対する詳細な検討が必要であることは言うまでもない。本研究では高木、清水、孫の日韓比較研究を取り上げ、日本人対朝鮮人という二分法ではなく、その関わりと相互作用にも注意し、<1><2>を検討したい。確かに、朝鮮神話学・文化史の先駆である三品の立場からすると、戦前・戦後における日本民俗学界の夥しい成果の中で、朝鮮に関する研究の少なさを、特に帝国の喪失後の戦後における「一国民俗学」への安住に対する批判的な立場を窺い知ることができる。

三品が指摘するように、端的に言えば、戦前・戦後における日本民俗学界は、朝鮮民俗学に無関心であったといえよう<sup>10</sup>。しかし、それと共に重要な問題は、「無関心」であったがゆえに、その少ない成果さえもその後において全く顧みられなくなった現状ではないか、と筆者は危惧している。少ない成果だとしても、その中に意味のある学史が存在するならば、それを厳密に検証して今後の課題に昇華していく作業が重要ではないだろうか。実際に、1910年代における日本「民俗学」胎動期の代表的な雑誌『郷土研究』(第1期1913.3～1917.3)にも【表1】のように多くの朝鮮関連記事を読むことができる。

【表1】『郷土研究』収録の朝鮮関連論考

高木敏雄「三輪式神婚説話の就て」(1巻1号、1913年3月)
喜田貞吉「本邦に於ける一種の古代文明(銅鐸に関する管見)」(1巻2号、1913年4月)
新川末次の報告「朝鮮畜牛禁厭療法」(1巻3号、1913年5月)
柳田国男「雑報紹介 朝鮮の迷信と俗伝(植木末実著)」(1巻12号、1914年2月)
中山太郎「百済王族の郷土と其伝説」(上)(2巻1号、1914年3月)
中山太郎「百済王族の郷土と其伝説」(下)(2巻2号、1914年4月)
松村武雄「虎と人の争に狐の裁判」(2巻2号、1914年4月)
梅原末治「百済王遺蹟」(2巻3号、1914年5月)
喜田貞吉「百済王遺蹟に関して中山太郎氏へ」(2巻3号、1914年5月)
松村武雄「日韓類話」(2巻4号、1914年6月)
中山太郎「喜田博士並に梅原氏に答ふ」(2巻5号、1914年7月)

【表1】のように『郷土研究』には朝鮮説話に関わる多くの論考が掲載されていることが確認できる。初期日本民俗学は朝鮮について関心を持ち、論争が展開されたが、1945年以後にも具体的に検討されないまま今日に至っている。東アジア比較研究の必要性が高まっている今日、植民地期になされた研究成果を総体的に検証し、それを位置づける作業は喫緊の課題であると思われる。

『郷土研究』に収録された朝鮮関連論考の分析も重要であるが、『郷土研究』に寄稿した会員のその後を追跡する作業も求められる。上記の第1期の『郷土研究』寄稿者の中で朝鮮説話集を公刊したのは、高木敏雄、田中梅吉(1883～1975)、松村武雄(1883～1969)である。

- ・高木敏雄『新日本教育昔噺』敬文館、1917年1月、東京(1917年9月四版、1918年版、1923年版、1924年版、1925年版)
- ・朝鮮総督府(田中梅吉)『朝鮮童話集』大阪屋号書店、1924年、京城(挿画入り『朝鮮童話』全三巻、活文社、京城、1925年)。
- ・松村武雄著『第十六巻日本篇 日本童話集』世界童話大系刊行会、1924年、東京(1929年近代社版、1931年誠文堂版、1934年金正堂版)。
- ・田中梅吉・金聲律訳『興夫伝 朝鮮説話文學』大阪屋号書店、1929年、京城。
- ・田中梅吉他著『日本昔話集下 朝鮮篇』アルス、1929年、東京。

その多くが版を重ねたことも重要である。『郷土研究』は1917年3月に休刊されたが、休刊号に「『郷土研究』寄稿者及通信者芳名」が掲載されている。休刊に臨み、寄稿者間の交流のための柳田の配慮とも解釈される。東京、大阪など内地に続き、沖縄、北海道、台湾、朝鮮の寄稿者順に配列されていることも留意すべきであろう。その中で朝鮮の通信者は、二宮徳、田中樞吉(梅吉)、稲田義功(稲田義助か)、木村宇太郎、清水兵三の5人である。

5人の中で説話研究に関わったのは、田中梅吉と清水兵三である<sup>11</sup>。また、1922年から新義州普通高等学校教師を歴任した寺門良隆(1885～?、1917年当時福井県から愛媛県立宇和島中学校に転勤)は朝鮮に渡り、朝鮮人生徒たちの日本語作文集『大正十二年説話集』を編んだ<sup>12</sup>。前述した高木、松村、田中は柳田の郷土会にも参加しており、『郷土研究』に論文を寄稿している。一方、清水と寺門は地方出身の忠実な資料報告者として『郷土研究』に〈資料及報告〉を寄せた。資料報告者としての役割に留まっていた清水と寺門は、朝鮮に渡り朝鮮総督府職員を勤めながら、資料採集と研究を行うようになる。即ち清水と寺門の朝鮮滞在は、内地人としての地位向上の契機となり、朝鮮民俗調査を遂行したということで、その内実に関する検討が求められる。次章では、まず高木の資料を検討したい。

## 2 高木敏雄の朝鮮説話集

高木に関する研究、特に説話に関わる研究は非常に少ない<sup>13</sup>。実際に「高木敏雄年譜<sup>14</sup>」にも説話集はほとんど取り扱われていない。筆者の確認調査によると、高木が出した説話集は以下のようなものがある。

高木敏雄『日本神話物語』服部書店、1911.5（1912年6月宝文館再版）。

高木敏雄『日本建国神話』寶文館、1912.3、6月再版。

高木敏雄『日本伝説集』郷土研究社、1913.8（1924年4月武蔵野書院再版、1926年2月四版、1929年6月五版、1943年10月版）。

高木敏雄『世界動物譚話 新イソップ物語』寶文館、1912.3。

高木敏雄『大正新イソップ』実業之日本社、1914.1。

高木敏雄『教訓日本昔ばなし』前篇（1923年版以降は『教訓日本昔ばなし』に改題）、敬文館、1917.3、朝日新聞1917年9月20日広告第五版、1918年版（課外教育お伽文庫第6編）、1923・4・5年版。

高木敏雄『教訓日本昔ばなし』後篇（1923年版以降は『教訓児童昔ばなし』に改題）、敬文館、1917.6、1918年版（課外教育お伽文庫第7編）、1923・4・5年版。

高木敏雄『新日本教育昔噺』敬文館、1917.1、朝日新聞1917年9月20日広告第四版、1918年版（課外教育お伽文庫第8編）、1923・4・5年版。

高木敏雄『日本家庭昔噺』前篇、（1923年版以降は『日本家庭昔噺』に改題）敬文館、1917.12、1918年版（課外教育お伽文庫第9編）、1923・4・5年版。

高木敏雄『日本家庭昔噺』後篇、（1923年版以降は『少年家庭昔噺』に改題）敬文館、1918年版（課外教育お伽文庫第10編）、1923・4・5年版。

高木敏雄『教訓世界動物お伽噺』敬文館、1917.9、1918年版（課外教育お伽文庫第11編）、1923・4・5年版刊行か。

高木敏雄・小笠原省三『日本国民伝説』敬文館、1917.1、朝日新聞1917年4月6日広告再版、1918年版（課外教育お伽文庫第12編）、1923・4・5年版。

高木敏雄『家庭教訓童話』科外教育叢書刊行会、1918.6。

上記のように、高木は1911年から1918年にかけて13冊の説話集を刊行した。伝説・神話集に該当する4冊を除く9冊の「童話集」は、1912年以降に刊行されて版を重ねている。イソップ寓話などの刊行が早く、これらの「童話集」の刊行は、読売新聞の連載と深く関わっていると思われる。

高木は1911年1月5日から1916年12月28日まで約6年間にわたり、読売新聞に民間説話を連載している。1911年1月5日から1912年4月7日までは「新伊蘇普物語」、「続新伊蘇普物語」、「又新伊蘇普物語」を相次いで連載している。読者からの反響があり、続編が次々と連載された

ことが判る。その後、1912年8月1日から1913年1月31日までは「家庭童話 新版御伽草子」を連載し、1913年2月2日から1914年4月2日までは「世界童話 珍妙御伽百面相」という見出しに、それぞれの話に出典を明記しており貴重である。1914年4月3日から1916年12月28日までには「世界童話 婦人付録」に見出しを替えて長期間連載したが、出典は明記されていない。「世界童話 珍妙御伽百面相」は325回ほど連載されたが、その中に朝鮮の話と明記されたのは31話（50回）である。朝鮮の比重は決して少なくない。

高木は新聞の連載後、1917年には『新日本教育昔噺』＝朝鮮説話集を刊行した。高木は朝鮮説話集を1912年頃から著述していたようである。先述したように、1912年末に「日韓共通の民間説話」（『東亜之光』）を2回連載した高木は、それ以前に南方熊楠に宛てた書簡（1912年3月17日）の中で次のように述べている。

小生は目下『朝鮮童話集』の著述中にて、同時に童話学の著述も準備出来上り、近日中より執筆の筈に御座候。先に申上候日本童話の材料は可なり有之候に付、四月下旬より『読売新聞』に連載の筈に相成居候<sup>15</sup>。

上記の引用によると、高木は1912年3月に童話学の著述（『修身教授 童話の研究と其資料』寶文館、1913年）の原稿を仕上げ、次に「朝鮮童話集」に取り掛かっていたことが判る。4月下旬から「日本童話」の連載を予定したが、少し遅れて「家庭童話 新版御伽草子」という見出しで8月から連載している。このように、高木は初期の神話研究に続き、1910年代からは『修身教授 童話の研究と其資料』、『童話の研究』（婦人文庫刊行会、1916年）を出すなど、民間説話を論じている。関敬吾が指摘するように、「現在、昔話・民話という用語が一般に使用されているが、最初は童話もしくは民間童話という言葉が好んで使用された」<sup>16</sup>。つまり、高木は（民間）童話というタームを使い、本格的に朝鮮説話を採集し、その延長線上で比較説話論を展開したことが確認できる。

まず、新聞に連載された31話の中、<91-92 馬の耳>は一然の『三国遺事』（1285年）から、<116 家鶏の勘定>は成俔の『慵齋叢話』（1525年）から採ったと明記されている。残りの29話の中の21話は「朝鮮民間伝承」と、残りの8話は「朝鮮」と明記されている。「朝鮮民間伝承」の21話は「口伝説話<sup>17</sup>」から採ったと思われるが、「朝鮮」の8話の前半は『慵齋叢話』第5巻から採ったものである<sup>18</sup>。

【表2】「朝鮮」と明記された説話の典拠

高木、読売新聞	典拠
97-98馬買	『慵齋叢話』第5巻
101-105愚津政の風呂番	『慵齋叢話』第5巻
110山火事	『慵齋叢話』第5巻
111-113御祈禱騒ぎ	『慵齋叢話』第5巻
131龍宮見物	『慵齋叢話』第5巻
246家泥棒	口伝説話か
252虎と狐	
269-271石地藏の嘖嘖	

【表2】の前半の5話は連続して「朝鮮」と明記されており『慵齋叢話』から採り、後半の三つの話は「朝鮮民間伝承」を略して「朝鮮」と記したと思われる。すなわち、31話の中で前代の文献から採ったものは、7話に過ぎず、24話は口伝説話と思われる。

このように、高木は1912年3月以前から朝鮮説話集を執筆していたが、すぐには刊行されず、まずは1913年2月から翌年の1月にかけて、31話を読売新聞に掲載した。その後、1917年1月に『新日本教育昔噺』という題で朝鮮説話集を出し、52話を収録した。『新日本教育昔噺』の「序」には次のように述べられている。

此度御覧に入れますのは、新日本教育昔噺と題しまして古い日本の古臭い、ありふれた、話し古して、聞き古した昔噺とはずつと異ひまして、海一つ渡つたさきの、新しい日本で、昔から伝はつた、数ある昔噺のそのなかで、念に念を入れて、撰りに撰つて、拾ひ上げましたお話の数が五十と幾つ、どれも、これも、至つて面白い、為になるお話ばかり、一週間に一つ話して一年分、一晚に一つとしても、ざつと二月と云ふその間の、お子供衆のおたのしみ、おとな方の笑ひ草、読んで聞かせて、読ませて聞いて、笑ふ門には福の神が舞ひこんで、貧乏神が飛出して、家内安全、無病息災、この上もない結構な教育昔噺、なにとぞ御遠慮なしに御覧下さいませ。 大正五年十二月 編者識（強調及び下線は筆者）<sup>19</sup>

「新日本」とは1910年8月の「韓国併合」によって帝国日本の一部となった朝鮮を指す。文明的な立場から日韓共通の説話学に関心を示した高木は、「朝鮮に数ある昔噺の内<sup>20</sup>」、日本に「昔から伝はつた」多くの昔話のなかで、「念に念を入れて、撰りに撰つて、拾ひ上げ」た「面白い」52話を収録したと述べている。朝鮮語ができなかった高木は、エンスホフ（Dominicus Enshoff 1868～1939）の資料<sup>21</sup>、清水兵三をはじめ、高橋の資料集と『三国遺事』『慵齋叢話』『三国史記』などの漢籍などから広く材料を得て1910年代初めから朝鮮説話集の刊行を目指したと思われる。新聞と単行本に収録された朝鮮説話をまとめたのが、【表3】である。

【表3】高木敏雄の朝鮮説話集の中の個別説話目録

(強調及び下線は筆者による。)

『読売新聞』1913.2.4～ 1914.1.25	『新日本教育昔噺』	1917 典拠
2-3亀は万年(朝鮮民間伝承)	14 亀の年齢	Enshoff21
4孫作の親爺(朝鮮民間伝承)	50 倅の親爺	Enshoff44
5-7仙人岳(朝鮮民間伝承)	11 新浦島	Enshoff28
14借金取(朝鮮民間伝承)	30 借金取	Enshoff39
15隠居と和尚(朝鮮民間伝承)	31 和尚の敵討	Enshoff40
21三人馬鹿(朝鮮民間伝承)	21 三人伴侶	Enshoff29
22-26欲張長者(朝鮮民間伝承)	3 馬鹿な金満家	Enshoff27
27牛に成つた放蕩息子(朝鮮民間伝承)	24 牛に成つた大臣の子	Enshoff25
31-32嘘話(朝鮮民間伝承)	46 婿取	Enshoff26
33寒中の筈(朝鮮民間伝承)	Enshoff24	
39困つたお嫁さん(朝鮮民間伝承)	Enshoff47	
60子供の智慧(朝鮮民間伝承)	27 子供の智慧	Enshoff31
61強盗と番頭(朝鮮民間伝承)	28 盗賊と番頭	Enshoff45
62虎と喇叭手(朝鮮民間伝承)	44 虎と喇叭手	Enshoff32
80明日は何時(朝鮮民間伝承)	51 明日	Enshoff48, モチーフ類似
91-92馬の耳(三国遺事)	20 驢馬の耳	三国遺事
97-98馬買(朝鮮)	7 馬一匹に騎手三人	慵齋叢話
101-105愚津政の風呂番(朝鮮)	2 三年忌	慵齋叢話
110山火事(朝鮮)	29 和尚と小僧	慵齋叢話
111-113御祈禱騒ぎ(朝鮮)	15 猫鳥の禁獣	慵齋叢話
116家鶏の勘定(慵齋叢話)	12家鴨の勘定	慵齋叢話
131龍宮見物(朝鮮)	9 盲目の竜宮見物	慵齋叢話
135成金術(朝鮮民間伝承)	33 成金術	
139-140田鼠の嫁入(朝鮮民間伝承)	49 土龍の嫁入	清水か
145鶏の御馳走(朝鮮民間伝承)	25 死んだ鶏	清水か
147小豆のお粥(朝鮮民間伝承)		
158牡馬の子(朝鮮民間伝承)	19 牡馬の子	清水か
162嘘八百圓(朝鮮民間伝承)	41 嘘百円	
246家泥棒(朝鮮)	18 釜の家	
252虎と狐(朝鮮)		
269-271石地藏の噴嚏(朝鮮)	1 石地藏のくしゃみ	清水か
	4 和尚の雀踊	慵齋叢話
	5 兎の生肝	三国史記
	6 大工と植木屋	清水か
	8 麻仁粕	
	10 嫁の改心	
	13 坊主の河渡	慵齋叢話
	16 瓜の種子	清水
	17 瘤取	高橋亨
	22 驢馬の卵	清水か
	23 嘘の賭	清水か
	26 人蔘	Enshoff22

	高橋亨
32 馬鹿婿	慵齋叢話
34 新松山鏡	高橋亨
35 三年坂	
36 独脚伊	
37 狐の裁判	高橋亨、 Enshoff12・13
38 婚礼の夜	
39 書生の悪戯	慵齋叢話
40 新舌切雀	高橋亨
42 打出小槌	酉陽雜俎
43 乞食の大將	
45 尼の踊	
47 三萬圓の鼻48 驢馬と百姓親子52 化物屋敷	

【表3】のように、新聞には31話、単行本には52話が収録されたが、題名のみならず、内容にも多少の変化が見られる。新聞に連載された<33 寒中の筈>、<39 困つたお嫁さん>、<147 小豆のお粥>、<252 虎と狐>の4話は単行本には載せられず、新たに25話が収録された。

新聞連載の「2-3 亀は万年」から「80 明日は何時」までの14話は、いずれもエンスホフの51話の中から改作して掲載した。その後は、『慵齋叢話』、『三国遺事』、清水などの報告から採ったと思われる。【表4】のように、高木の説話集は、彼の説話論の展開と深く関わっており、説話集には神話・伝説を除き、「日韓共通の民間説話」で言及した多くの昔話を収録しているが、高橋の資料集からの引用は最小限に留めたことが判る。

【表4】「日韓共通の民間説話」と説話集の関わり

「日韓共通の民間説話」(1912) 言及	『新日本教育昔噺』1917
東明王(朱蒙、三国史記)	×
甄萱(三輪山伝説、三国遺事)	×
羽衣伝説(高橋亨)	×
亀兎説話(三国史記、仏典の影響)	5 兎の生肝(三国史記)
癡兄黠弟(慵齋叢話)	101-105 愚津政の風呂番(慵齋叢話)
小僧と和尚(慵齋叢話)	29 和尚と小僧(慵齋叢話)
馬鹿の婿(慵齋叢話)	32 馬鹿婿(慵齋叢話)
無心出(清水兵三)	16 瓜の種子(清水兵三)
鼠の嫁入(仏典の影響)	49 土鯨の嫁入(清水か)
馬買い(慵齋叢話)	7 馬一匹に騎手三人(慵齋叢話)
亀の齢(エンスホフ)	14 亀の年齢(エンスホフ)
松山鏡(高橋亨)	34 新松山鏡(高橋亨か)
瘤取(高橋亨)	17 瘤取(高橋亨)
腰折雀(高橋亨)	40 新舌切雀(高橋亨)
金錐説話(酉陽雜俎)	42 打出小槌(酉陽雜俎)
鬼失金銀棒、解語亀、賈名人(以上、高橋)	×

新聞では文献説話からの掲載は最小限に留め、エンスホフと清水などの口伝説話を主に取り上げたが、単行本では朝鮮を代表する説話を広く収録する目的で、新たに高橋の資料集、『酉陽雜俎』、『三国史記』(1145年)などからも採っている。その中で最も大きな影響を受けたのは、エンスホフ、『慵斎叢話』、高橋と共に、清水兵三であったと思われる。次章では、清水との関わりを中心に日韓説話論の展開を述べたい。

### 3 清水兵三の比較研究

『島根県大百科事典』には清水兵三の項目が設けられている<sup>22</sup>。

清水兵三 1890年7月20日～1965年3月14日(明治23～昭和40年)民話・民謡の研究者。松江市堅町生まれ。号は氷山。県立松江中学校、東京外国語学校朝鮮語科を卒業。日本民俗学の樹立者、柳田国男とともに、わが国の神話・伝説・民話研究の道を開拓した高木敏雄の知遇を得た。出雲の昔話・わらべうたを柳田国男・高木敏雄編集の『郷土研究』にしばしば投稿、高木敏雄編による朝日新聞社(正しくは郷土研究社-引用者注)刊の『日本伝説集』にも採択され、南方熊楠の『南方隨筆』にも引用されている。朝鮮総督府に勤め、朝鮮半島・満州・蒙古・シベリア方面に旅し、諸民族の民話・民謡を採集し比較研究を試みたが、第2次世界大戦後、資料を京城に残したまま引き揚げて、松江市新雑賀町に居住した。山陰民俗学会に入り、『山陰民俗』『伝承』にもしばしば寄稿した。1965年(昭和40年)3月、『出雲の民話民謡集』を松江市の第一書房から出版し(1975年=昭和50年1月再版、黒田書店、松江市)、時を同じくして生涯を閉じる。ほかに未定稿(出雲の地名の研究)も残されている。晩年は蔵書の山に囲まれての独居生活であったが、日常生活だけでなく、葬儀についても黒田書店主の黒田博の献身的な尽力によるところ大であった。

石井正己の研究によると、『山陰民俗』には寄稿していないが、「山陰地方の郷土研究の先駆者」として清水に関する検討が求められる<sup>23</sup>。また石井は、日本で発表された単行本と雑誌を中心に「清水兵三に関する書誌」を明らかにして、朝鮮在留時代における清水に注意を喚起している。

高木の『日本伝説集』(1913年)に収録された清水の報告は、孫晋泰の「朝鮮民間説話の研究―民間説話の文化史的考察(9)」(『新民』37号、1928年5月)や『朝鮮民譚集<sup>24</sup>』(1930年)にも取り上げられており興味深い。

清水は1910年東京外国語学校朝鮮語科に入学した<sup>25</sup>。1910年の夏休みに帰省し、島根県の商業学校の朝鮮語講師李種植(1887～?)に出会い2か月間毎日のように会い、李から直接朝鮮説話を聞いたと思われる<sup>26</sup>。その後清水は、高木と交流を深めながら1913年に卒業し、朝鮮に渡る。朝鮮総督府編『朝鮮総督府及所属官署職員録』によると、清水の名がみえるのは、1915年からである。1917年まで約3年間朝鮮半島の北端の平安北道新義州府書記を勤め、1918年からは約3年間平安北道龍川郡書記を務めた後、1921年から朝鮮総督府内務局の配置となる。第二課を経

て1922年から29年まで社会課に勤めた。1920年に新設された社会課は1931年から35年まで一時廃止されており、それも影響したのか、1930年には朝鮮総督府総督官房の外事課に移り、翌年から1934年まで慶尚南道統営郡の郡守[郡の長]を勤めた。1933年夏、統営郡には台風による「空前の惨禍」があり、翌年『統営郡風水害誌<sup>27</sup>』を発刊したが、1935年に退職して昌徳宮で10年間勤務し、敗戦を迎えて引き揚げた。

清水が朝鮮で発表した論考をまとめたのが【表5】である。

【表5】 朝鮮滞在時期における清水兵三の著作目録

清水兵三（新義州府書記）「現代朝鮮洞里名の研究」『朝鮮彙報』1915年7月号
清水兵三（新義州）「朝鮮物語の研究」『朝鮮彙報』1916年1月号
清水兵三（総督府屬）「朝鮮の童謡」『朝鮮』1927年5月（144号）
清水兵三（総督府屬）「朝鮮の童謡（二）」『朝鮮』1927年6月（145号）
清水兵三（総督府屬）「朝鮮の童謡（完）」『朝鮮』1927年7月（146号）
清水兵三（総督府屬）「朝鮮の民謡（上）」『朝鮮』1927年8月（147号）
清水兵三（総督府屬）「朝鮮の民謡（下）」『朝鮮』1927年9月（148号）
青丘同人「朝鮮の軟文学に現はれた両性問題に対する社会的考察（上）」『朝鮮及満洲』1927年5月（234号）
青丘同人「朝鮮の軟文学に現はれたる両性問題に対する社会的考察（中）」『朝鮮及満洲』1927年6月（235号）
青丘同人「朝鮮の軟文学に現はれたる両性問題に対する社会的考察（中の二）」『朝鮮及満洲』1927年7月（236号）
青丘同人「朝鮮の軟文学に現はれたる両性問題に対する社会的考察」『朝鮮及満洲』1927年10月（239号）
清水兵三「支那の見方と排日に就て」『朝鮮及満洲』1927年10月（239号）
清水兵三「村の栄光」『朝鮮及満洲』1927年11月（239号）
清水兵三「朝鮮女性礼賛」『朝鮮及満洲』1928年1月（242号）
清水兵三（奉天）「満洲と高麗民族との地史的關係」『朝鮮及満洲』1930年9月（274号）
清水兵三（奉天）「満洲と高麗民族との地史的關係」『朝鮮及満洲』1930年11月（276号）
清水兵三（奉天）「奉天の東陵と北陵」『朝鮮及満洲』1931年2月（279号）
青丘同人「社会問題としての売笑（新しき公娼制度の提唱）」『朝鮮社会事業』1926年9月、4巻9号
青丘同人「民間伝承に現はれた朝鮮の社会相」『朝鮮社会事業』1926年10月、4巻10号
青丘同人「売笑問題に関して鹿悟生氏の批判に答ふ」『朝鮮社会事業』1926年11月、4巻11号
青丘同人「朝鮮童話 もぐろもちの婿」『朝鮮社会事業』1927年1月、5巻1号

青丘同人「朝鮮童話 石仏のくしゃみ」『朝鮮社会事業』1927年2月、5巻2号  
 青丘同人「朝鮮童話 婿選び」『朝鮮社会事業』1927年3月、5巻3号  
 青丘同人「禁酒問題に就て」『朝鮮社会事業』1927年4月、5巻4号  
 青丘同人「朝鮮童話 新婚の夜」『朝鮮社会事業』1927年4月、5巻4号  
 青丘生「朝鮮童話 虎より強いもの」『朝鮮社会事業』1927年5月、5巻5号  
 青丘同人「朝鮮童話 おなら競べ」『朝鮮社会事業』1927年6月、5巻6号  
 青丘 清水兵三「朝鮮童話 驢馬の卵」『朝鮮社会事業』1927年7月、5巻7号  
 清水兵三「縦書横書可否論」『朝鮮社会事業』1927年7月、5巻7号  
 清水兵三「羽織、周衣、ワイシャツ廃止論」『朝鮮社会事業』1927年8月、5巻8号  
 青丘 清水兵三「朝鮮童話 仲人八百」『朝鮮社会事業』1927年8月、5巻8号  
 青丘 清水兵三「朝鮮童話 女夫波」『朝鮮社会事業』1927年9月、5巻9号  
 清水兵三「支那の社会事業（上）」『朝鮮社会事業』1927年9月、5巻9号  
 清水兵三「支那の社会事業（下）」『朝鮮社会事業』1927年10月、5巻10号  
 青丘 清水兵三「朝鮮童話 山僧の恋」『朝鮮社会事業』1927年10月、5巻10号  
 青丘 清水兵三「朝鮮童話 賭事」『朝鮮社会事業』1927年11月、5巻11号  
 清水兵三「朝鮮郷土研究の社会的意義」『朝鮮社会事業』1927年11月、5巻11号  
 清水兵三「朝鮮の郷土と民謡」（市山盛雄編『朝鮮民謡の研究』坂本書店、1927年、京城）  
 清水兵三『朝鮮料理を前にして』京城旅行案内社、1928年、京城

【表5】のように清水は、「青丘同人」「青丘生」という筆名で、朝鮮社会事業研究会が刊行した月刊誌『朝鮮社会事業』を中心に多くの論考を発表している。「朝鮮童話」を連載する最中、「編輯室より」に清水（青丘同人）を紹介している。

氏は性豪放で頗る文藻に富み昨年京城府が府歌を募集した際も投稿して三等賞に当選せられた程文才に長じた雅人である<sup>28</sup>。

また、市山盛雄編『朝鮮民謡の研究』の著者紹介欄に次のように紹介されている。

清水兵三氏 朝鮮総督府社会課に勤務、熱心な朝鮮民衆芸術の研究家で、朝鮮の童話童謡、民謡などの考察を新聞雑誌に発表されている、出雲に関する研究ものなどは南方熊楠氏の著書にも多分に氏の説を引用され民族の研究家として斯界権威ある人達の間には夙に知られている、近く朝鮮の民俗に関する著を脱稿される筈<sup>29</sup>。

1927年段階で清水は、「朝鮮民俗に関する著」を脱稿する予定だったが、『朝鮮料理を前にして』（京城旅行案内社、1928年、52頁）を除いては朝鮮説話・民謡関連本は出版されなかったようで

ある。清水の論文の中で多くの分量を占めるのが朝鮮民謡に関する論考である。清水の朝鮮民謡論は、孫晋泰の民謡論に大いに影響を受けたように思われる。清水は、孫が『新民』（朝鮮語雑誌）や『東洋』に寄稿した論文を取り上げながら、次のように孫の論文をまとめている。

朝鮮の歌詞を分けて、時調と民謡とにする。詩調（又は時調）といふのは、貴族社会の産物で、民謡は平民社会の産物で、詩調より古い。[引用者注] 詩調と朝鮮民族性の関係に就ては、七月号の『新民』雑誌および五月中の『東洋』雑誌に、面白く連載せられている。これによると、貴族社会の歌謡も、時代の変遷と共に種々変化して、当初諧謔好きな、平和な素朴な、国民であった、朝鮮民族が、漸次政治的に、或は経済的に、殊に異邦人の侵略を蒙りし影響が、詩歌の上には勿論、国民性にも大なる、変調を来たし、高麗朝時代には、相当大抱負と大理想とを把持していたものが、冷酷な現実の為に漸次、人間社会を厭ふて自然界に親まんとする傾向を生じ、遁世的となり、退嬰的となり、やがて廢頹の気分を帯びる様になった（中略）。この解説は、移して直ちに民謡の変遷に、適用することが出来やうと思ふ<sup>30</sup>。

孫晋泰は、1926年5月の『東洋』（第29年5月号）に「朝鮮の古歌と朝鮮人」を、同年7月の『新民』（15号）に「詩調と時調に表れた朝鮮人」を連載している<sup>31</sup>。翌年の7月からは『新民』に孫晋泰の「朝鮮民間説話の研究 - 民間説話の文化史的考察」を15回連載しているが、朝鮮語に精通し比較研究に関心を持っていた清水は、それを読んだ可能性が高い。

孫の詩調論（時調論）<sup>32</sup>から示唆を得た清水は、貴族社会に対して平民社会の理解にこそ朝鮮民族性を理解するのに不可欠であると主張し、孫の議論と日本語訳を踏まえて、朝鮮民謡・童謡論を展開している<sup>33</sup>。

#### 4 清水の説話採集と高木の継承

清水の民俗学への関わりは、高木敏雄が『東京朝日新聞』に1911年12月19日から連載した「民間伝説及童話」に資料を報告したことから始まる。『東京朝日新聞』の連載を分類してまとめた『日本伝説集』（郷土研究社、1913年）には清水の報告が25話収録されており、第1期の『郷土研究』には計16回報告している<sup>34</sup>。清水は、高木敏雄の比較論に影響を受け、生涯にわたって比較研究に関心を持ち続けた。1916年1月、『朝鮮彙報』に投稿した「朝鮮物語の研究」は、それをよく反映しており、注目される。清水は「比較研究を啻に日鮮間のみ止めず、広く蒙古、満洲、西藏、印度に涉って深く、詮索して、或は民族の移動とか、文化の漸進する経路とか、思想変遷の由来とか、人情風俗の物語に及ぼす影響とかを観察し得るならば、趣味と実益とに資する処、蓋し粒粒たるものではあるまい<sup>35</sup>」と主張してから、実際に先行研究（『日本伝説集』、『朝鮮の物語集』、J.S.Galeなどの英訳朝鮮説話集、『南方隨筆』、『東國輿地勝覽』など）を参照して「三輪山式神婚伝説」「瘤取りの説話」「興富伝」「仙女浴泉記」「龜と兎の生膽」「鏡に関する童話」「人

と虎の争ひ」を比較検討している。また【表5】の清水著作目録で示したように、1927年に朝鮮社会事業研究会の『朝鮮社会事業』に朝鮮童話を11回連載している。重要な事実は、その連載が高木の説話集と深く関わっているということである。

【表6】高木の説話集と清水の「朝鮮童話」との関わり

清水「朝鮮童話」1927	高木『新日本教育昔噺』1917	備考
もぐろもちの婿	49 土龍の嫁入	
石仏のくしゃみ	1 石地蔵のくしゃみ	
婿選び	46 婿取	Enshoff27
新婚の夜	16 瓜の種子	
虎より強いもの		
おなら競べ		
驢馬の卵	22 驢馬の卵	
仲人八百		
女夫波	6 大工と植木屋	
山僧の恋	4 和尚の雀踊	慵齋叢話
賭事	23 嘘の賭	

【表6】のように、11話の中で、8話が高木の資料と重複している。話のあらすじも完全に一致しており、その関わりが注目される。高木の「46 婿取」はエンスホフから、「4 和尚の雀踊」は『慵齋叢話』から採った可能性もあるが、この中で「無心出」説話は清水が高木に提供したものである。高木は『東京朝日新聞』に連載の「民間伝説及童話」に「家庭童話 金の生る木」(1912年1月10日、大分県)を掲載した。「金の生る木」は、殿様の奥方がお客の前でおならをし、離縁された人がいて、その子どもが知恵を働かせて許しを請うという話である。これが発表された翌日、清水は「朝鮮昔噺と日本昔噺とは、同形式のものがある(これは俚諺も同じ)。例えば、「瘤取り」とか「羽衣」とかは、その好適例であるが、昨日朝日紙に現われた「金のなる木」もまた異曲同工のものがある」と高木に報告しているのである<sup>36</sup>。

「無心出」説話を比較すると、下記の【表7】のようになる。

【表7】「無心出」説話の対照表

高木「日韓共通の民間説話」1912	清水「新婚の夜」1927	高木「瓜の種子」『新日本教育昔噺』1917	田島泰秀「新婚のお尻」1923 <sup>37</sup>
<p>ある花嫁が新枕並べた夜のこと、おならを一つやったので、婿君は三下り半で御免蒙ってしまった（中略）月満ちて玉の男子を設けた。名を"無心出"とつけた（中略）無心出も通学するようになったが、友達が（中略）嘲弄す（中略）主人が『どこに屁をひらぬものがあるかえ』。無心出『それじゃ、私のお母様も婚礼の晩におならをなすったんだワ（中略）』。（中略）わが子であることがわかったから、直ちに離縁した女房を迎えたという。よい子じゃ。</p>	<p>花嫁さんが新婚の晩どうした、はづみかうっかりオナラを落した（中略）早速離縁することになった（中略）月満ちて生れたのは玉の様な男の子、今ならば私生児とでも届出るのが其時は無心に産んだから、その児の名前を無心出とつけて（中略）無心出は成長するにつれて学校へ行きだが（中略）学友どもは（中略）からかった（中略）「だってオナラを落さぬ奴があるものかと」いふと、すかさず無心出は。「デモ僕のお母さんは婚礼の晩にオナラを落した」（中略）自分の子供であることが分ったので不取敢無心出の母を尋づねて懇ろにいたり末長く母子の面倒を見たといふ。めでたしめでたし。</p>	<p>花嫁が新婚の晩に、どうした機か、おならを一つはずして了つた。（中略）泊つてみた婿殿は、何と思つたか、黙つて起つて、自分の家へ帰つて了つた（中略）月満ちて、玉のやうな男の子を生んだ。無心出と名をつけて（中略）学校へ通ふやうに成つた。（中略）友達が嘲弄つたり（中略）『馬鹿、世の中に屁をひらぬものがあるか』と親が怒鳴りつける。『其では何故旦那は、奥様と別れて了つたのですか、』と児が云ふ。（中略）元の通り、仲善く一緒に棲むやうに成つた。朝植えた瓜の種子は、真実に其日のうちに、食べられるやうに成つたのであつた。</p>	<p>昔、花嫁が結婚した夜、大きな屁を落したので（中略）其のまゝ家出をしてみました（中略）月満ちて生れた子供を無心出と名づけ（中略）書堂えも通う様になつたが、どうも書堂の子供たちが（中略）ひやかすので（中略）「（中略）屁を放らぬ人が此の世に居るかい」「でも私のお父さんは、お母さんが嫁入つた晩に屁を放つたので、愛想を尽かして出て行つた（中略）」（中略）主人が初めて事情を覺り、此の子の素性を聞くと、果して我子に違ないので、早速母親と共に引きとつたとの事である。</p>

【表7】のように「無心出」説話は、1912年の報告に基づいていることが判る。この話は高橋亨『朝鮮の物語集』をはじめとした以前の説話集には、収録されていない初の報告であると思われる。1923年には田島泰秀が採集し、1980年代に集成された韓国精神文化研究院の『韓国口碑文学大系』には同じ話型のもものが四つ収録されている<sup>38</sup>。

また「土鯨の嫁入」は日本でもお馴染みの昔話であり、【表4】に高木が指摘したように仏典の影響が強い。朝鮮の文献でも多く見られ、柳夢寅（1559～1623）の『於于野譚』（1622）などに類話が存在するが、清水と高木の報告とは異なっている。

【表8】清水と高木の「土竜の嫁入」

清水「もぐろもちの婿」 1927	高木「 <sup>もぐろ</sup> 田鼠の嫁入」1913	高木「 <sup>もぐろ</sup> 土龍の嫁入」1917
<p>昔、むかし恩津の石地藏様の地下に土竜の夫婦が棲んでゐました。此夫婦の仲に其はそれは美しい奇麗な娘が生れた、両親は大層可愛がつて育て、あると月日の立つのは早いもので、この娘も、いつしか年頃になつた、そこで親達は何んでも世界で一番偉い者を婿にとらうと考へた。</p> <p>「のうお母さん、世界で一番偉い者と云へばアノ日様だらうのう」（中略）土竜の親は太陽の方をあきらめて、黒雲の所へ行つた（中略）土竜は不得止、風の神様の処へ御願しに行つた。（中略）石地藏の前へ頭を低げて願ひました（中略）「（中略）吾々が一番偉いといふことは全く気が付かなかつた、これでヤツト納得が行つた、土竜は矢張土竜同志婚礼するであらう」めでたしめでたし。</p>	<p>昔むかし、そのむかし、山の上に、素晴らしい大きな石の御地藏様が有りました。その御地藏様の下の土の中に、<sup>もぐろ</sup>田鼠が棲んでをりました。</p> <p>この田鼠が赤ン坊を産みました。可愛らしい女の田鼠でありまして、頸が短かくて、眼がくりくりして、歯が小さくて鋸のやうに鋭くて、口がとんがつて、皮がぴかぴか光つて、それはそれは可愛らし女子でありましたから、親田鼠が大層大事にして、可愛がつて、育てました。（中略）世界で一番えらい、強い者と云つたら、御天道様が一番だ。（中略）親田鼠は黒雲の入道雲様のところへ行つて（中略）親田鼠は風のところへ行つて（中略）親田鼠は石の御地藏様のところへ行つて（中略）私の下の地の中に棲んでゐて、年から年中穴を掘つて仕様の無い奴がある。（中略）田鼠は矢張田鼠同志がよい、と云つて聞かせて、親類の田鼠の子をお婿さんに貰ひました。</p>	<p>昔むかし其むかし、東の谷から西の谷へ超える時の中程のところに、大きい石地藏様が、道傍に突立つてゐた。その地藏様の下の底の地の中に、土龍の夫婦が穴を掘つて棲んでゐた。</p> <p>此夫婦土龍が牝の子を生んだ。土龍の子だから、どうせ碌な者ぢやああるまい、と思ふと大変な間違である。毛がぴかぴか光つて、<sup>びろうと</sup>天鵝絨のやうに柔軟で眼がくりくりして、口が小さく尖からがつて、歯が鋸のやうで、其はそれは珍しい奇麗な可愛らしい娘であつたので、親たちが大層喜んで育て、（中略）世の中で一番強い者と云つたら、御天道様だらう。（中略）黒雲の神様のところへ行つて（中略）今度は風の神様のところへ行つて（中略）石地藏様の前へ行つて（中略）乃公の立つてゐる下の地の底に穴を掘つて、棲んでゐる奴がある。（中略）土龍のところへ嫁入をすることに成つた。どんな嫁入だつたらう。僕は其を見物したが、大層雪の降る暑い日で、帰途に河に滑り込んで、大火傷をした。</p>

【表8】のように、高木と清水の記述は共通点が多い。漢文の『於野譚』は息子の野鼠を産み、偉い家門との婚姻を目指し、天、雲、風、京畿道果川の石弥勒を訪ねる話となっている。また、同時代の高尚顔（1553～1623）の『効嘸雜記』は野鼠ではなく、リスが日、月、雲、風、石弥勒を訪ねている。また、洪萬宗（1643～1725）の『旬五志』（1678）はリスが天、日、月、雲、風、石弥勒を訪ねている<sup>39</sup>。いずれも野鼠（またはリス）の嫁さがしの話で、初めに訪ねる者は天が一般的である。それに対して、高木の話はもぐら（田鼠、土龍）の娘の嫁入りのために日から訪ねる順序となっており、清水の話と完全に一致している。このように高木の「土龍の嫁入」は、文献よりは清水の報告によったと思われる。また、清水の取り上げた説話が高木の説話集と重なっているのは、両者の関心の類似性と共に、高木への追悼の念が込められていたのかも知れない。

## 5 ソン・ジンテ 孫晋泰の日韓説話論

朝鮮民俗学の創立者と評価される孫晋泰は、朝鮮語雑誌『新民』に15回連載（1927年7月～29年4月）された「朝鮮民間説話の研究—民間説話の文化史的考察」を1947年に『朝鮮民族説話の研究』としてまとめた。現在『新民』は欠号が多く、孫の論考を揃えることは困難であったことも影響し、先行研究では、分析の対象から外され、解放後の『朝鮮民族』のみが分析対象とされてきた。しかし、筆者の分析によると、単行本は雑誌連載から二十年近くが過ぎているにも関わらず、序文を除くと、ほぼ発表当時のままであることが確認できた。つまり、解放後に出された『朝鮮民族説話の研究』は、孫の証言通り、雑誌の発表内容をほぼ「そのまま、とりあえず上梓」したものである<sup>40</sup>。

孫は「朝鮮民間説話の研究」の中で東アジア比較説話論を展開しているが、中国、北方、仏典の影響とともに「日本に伝播された朝鮮説話」を取り上げて、具体的に次の説話を検討している。

（一）使臣間の手問答、（二）青蛙伝説、（三）虎より怖い干柿説話、（四）三年唾婦伝説、（五）朝鮮の日月伝説、（六）虎兎説話、（七）癡壻説話、（八）茄子で防賊した説話<sup>41</sup>

孫の議論は高木の延長線上でなされており、上記の8篇の説話を論じてから孫は、次のように述べている。

この他にも「興夫説話」が日本に伝わって「舌切雀」説話になり、「瘤取りに行き瘤付けられて来た説話」が日本のそのまま伝わり「瘤取説話」になり、「無心出説話」（結婚初夜に無心にオナラをし離縁された新婦説話）が日本の大分県のある地方にそのまま残っており、成俔の『慵齋叢話』卷四にある「癡兒黠弟の笑話」が日本九州の一地方に残っていることは、故高木敏雄氏の『日本神話伝説の研究』三八九—四二二頁中に既に考証されているので、ここでは省きたい<sup>42</sup>。

上記の引用のように孫は、高木の「日韓共通の民間説話」を増補したことが判る。また、「虎

より怖い干柿」「朝鮮の日月伝説」「虎兎説話」の日本類話は高木の『日本伝説集』から引いている。ここでは、「古屋漏」の朝鮮類話「虎より怖い干柿」を中心に高木と孫の比較論を検討したい。

高木は「高木禿山人」という筆名で、『読売新聞』に1910年11月26日から翌年1月15日まで25回にわたって「驢馬の耳」を連載した。その中で「虎狼古屋漏」（12月13日～14日掲載）を考察している。高木は阿蘇山の寒村で報告された「虎狼古屋漏」を取り上げ、「虎狼」という表現に注目している。「虎と狼との二つでなく、「とらおかめ」と名のつく一種の鬼みたような、夜叉みたような怪物」と説明している。高木は、『パンチャタトラ』第五巻の第九「盗人と悪鬼とそれから猿」と題する話が「虎狼古屋漏」のもとであるとし、「本源地はインド」と結論づけた。その後、高木の『日本伝説集』には天然伝説第二十二の中に「猿」（肥後国阿蘇から報告）と題して報告されている。ここで注目すべきは、肥後国では「狼」が「虎狼」になっている。

「古屋の漏」は清水が1965年に出版した『出雲の民話民謡集』（第一書房）にも「漏り殿」と題して収録しており、「狼」ではなく「虎狼」となっている。しかし、柳田国男が関わった『旅と伝説』昔話号（1931年4月）にも清水の報告が「古屋の漏」と題して載せられているが、そこには「虎狼」ではなく「狼」となっており、柳田の意図を垣間見ることができる。『旅と伝説』に載せられた清水の原資料は「虎狼」であった可能性が高いと思われる。

孫晋泰もまた、『日本伝説集』の「猿」における「虎狼」に注目して次のように指摘している。

虎という冠詞がある以上、それは元来は確かに虎だったことが明白である。日本には虎豹類が棲息していないので、虎に関する伝説や説話は極めて稀である（また、朝鮮の虎の位置には常に狼を置くのが普通である）。それにも関わらず、朝鮮と近い九州の寒村から「虎狼」と今も伝わることをみると、その説話の本源地は印度であるが、日本の説話は朝鮮で成長したものを採ったことがわかる<sup>43</sup>。

この問題に関わって石井正己は、次のように指摘している。

[柳田は]「八東郡昔話」に「古屋の漏」を「鳥根県松江附近の童話」として報告しています。▽印以下は柳田の注記で、「十余りの馬鹿聾話に次いで、今日最も広く日本に分布して居るのは此話である。朝鮮半島にも同じものがあるといふが、「もり」といふ名を聴く条が同じで無い」などと言います。「古屋の漏」はよく知られた話ですが、「朝鮮半島にも同じものがある」というのは、清水が朝鮮半島の話を報告していたからにちがいません。

しかし、柳田は比較に関心がありませんから、八東郡の昔話だけを残し、朝鮮半島の昔話のことは注記で触れる程度です。しかし、この時期に柳田に報告したもののの中に、すでに「古屋の漏」は日本だけでなく、朝鮮半島にもあることを示唆していた意義は大きいはずです。それはむしろ高木の姿勢とつながります。この報告からは、一方では取り上げられながら、一方は切り捨てられてしまった側面が見えてくるはず<sup>44</sup>。

高木、清水、柳田の比較論に関わる立場のズレが興味深いのが、少なくとも高木は1912年までは朝鮮の「虎狼古屋漏」類話を知らなかったようである。高木の「虎狼古屋漏」考察は、1920年代になって孫晋泰によって展開されている。孫は『日本伝説集』に収録された朝鮮から近い九州の寒村（熊本）からの報告が「虎狼」となっていることに関心を示した。しかし、当時本格的な採集・分類が行われていなかった時期における孫の推測は、時代的な限界を露呈していることも事実である。

近年の研究によると、「虎狼」は東北から九州に至るまで分布している。大島建彦は日本全国から報告された619篇の「古屋の漏」を分析している。その中で50話以上報告された地域だけを示すと、【表9】のようになる。

【表9】「古屋の漏」と「虎狼」の頻度

	奥羽	中部	近畿	中国	九州
虎	44	1	4	6	8
虎狼	5	7	5	38	18
狼	61	121	34	70	16
その他	11	8	6	23	6
なし	9	7	2	19	8
計	130	144	51	156	56

(大島建彦の作成表より)

【表9】のように、「古屋の漏」は奥羽、中部、中国で多く伝承しているが、中部は「狼」が圧倒的に多い。それに対して奥羽は「虎」が多く、中国は「虎狼」が多く伝承しているものの、やはり「狼」がより多く地域的な差が見られる。興味深いのは、朝鮮半島と近い九州である。九州のみは「狼」よりも「虎」・「虎狼」がより多く伝承されている。計619の報告の中で、「狼」の347話に比べ、「虎」は76話、「虎狼」は79話で少ないが、九州だけはそれが逆転していることが分かる<sup>45</sup>。

黄仁徳の指摘通り、孫の議論は単一の素材に注目した単線的なものに留まっているにも関わらず、説話を構成する重要な要素には民族的特殊性が内包するという事実を考慮すれば、このような推論は一つの仮説として意味を持つ<sup>46</sup>。問題は1920年前後になされたこれらの比較論が、戦後における比較説話論の展開の中でほとんど顧みられなくなった状況である。高木、清水、孫を含めた1920年前後における比較説話学に関するより具体的な検討は今後の課題としたい。

おわりに

本文で新たな資料に基づいて考察したように、高木敏雄は1912年前後から朝鮮説話に関心をもち、1912年末に「日韓共通の民間説話」を発表した。この論考はアカデミズムの観点から本格的に日韓比較説話を論じた初めての成果である。この論考を作成するに当たり、高木はエン

スホフ、清水兵三、高橋亨、『慵齋叢話』等の朝鮮・中国文献などを駆使して多くの朝鮮説話を集め、読売新聞の連載を経て、朝鮮説話集を完成したことを確認できた。

また、高木の影響を受け、1920年代に展開された清水と孫晋泰の比較研究の可能性を検討してみた。戦後、帝国日本の崩壊とともに、植民地期になされた「比較研究」の記憶も忘れられた。その中で、清水は京城から引き上げた後、多くを語ることなく1965年に死亡し、孫晋泰は朝鮮戦争によって北に連れられてその後の業績が未だ明らかになっていない。

東アジアに関する言説が盛んに叫ばれるようになった今日であるからこそ、第二次大戦後、省みられなかった植民地期になされた比較研究の実相とその記憶を、丁寧かつ地道に検証する意味は決して小さくないはずである。

## 参考文献

- Enshoff (1911-2), 'Koreanische Erz hlungen.', Zeitschrift des Vereins f r Volkskunde. No.21-22.
- 飯倉照平編「南方熊楠・高木敏雄往復書簡」『熊楠研究』5、2003年
- 石井正己「郷土研究と出雲—清水兵三と高木敏雄・柳田国男—」『山陰民俗研究』14、2009年
- 大島建彦『日本の昔話と伝説』三弥井書店、2004年
- 金鉉龍『韓国文献説話』7、建国大学校出版部、2000年
- 市山盛雄編『朝鮮民謡の研究』坂本書店、1927年
- 清水兵三「朝鮮物語の研究」『朝鮮彙報』1916年1月
- 清水兵三「出雲と朝鮮—思い起こすままに—」『伝承』5、山陰民俗学会、1960年9月
- 孫晋泰「朝鮮民間説話の研究」9-10、『新民』37-38、1928年
- 関敬吾「解説」、高木敏雄『童話の研究』講談社、1977年
- 高木敏雄『新日本教育昔噺』敬文館、1917年
- 高木敏雄「日韓共通の民間説話」『東亜之光』7巻11・12号、1912年（高木敏雄『増補 日本神話伝説の研究』2、平凡社、1974年）
- 立石展大『日中民間説話の比較研究』汲古書院、2013年。
- 原宏「清水兵三」『島根県大百科事典』上巻、山陰中央新報社、1982年
- 増尾伸一郎「孫晋泰と柳田國男—説話の比較研究の方法をめぐって—」『説話文学研究』45号、2010年
- 『朝鮮社会事業』、『朝鮮彙報』、『朝鮮』、『朝鮮及満洲』
- 拙稿「清水兵三の朝鮮民謡・説話論に対する考察」『温知論叢』28輯、2011年
- 拙稿「孫晋泰の東アジア民間説話論の可能性—『朝鮮民族説話の研究』の形成過程をめぐって—」『説話文学研究』48号、2013年

## 註

- <sup>1</sup> 日韓比較説話学の展開については、次の論稿を参照。増尾伸一郎「孫晋泰と柳田國男—説話の比較研究の方法をめぐる—」（説話文学会『説話文学研究』45号、2010年）；小峯和明「南方熊楠・東アジアへのまなざし」（田村義也・松居竜五編『南方熊楠とアジア』勉誠出版、2011年）；拙稿「孫晋泰の東アジア民間説話論の可能性—『朝鮮民族説話の研究』の形成過程をめぐる—」（『説話文学研究』48号、2013年、など）。
- <sup>2</sup> 高木敏雄「日韓共通の民間説話」『東亜之光』7巻11号、1912年（高木敏雄『増補 日本神話伝説の研究』2、平凡社、1974年、227頁）。
- <sup>3</sup> 今の韓国では、神話・伝説・民譚（昔話）の総称として「ソルファ（説話）」（以下、説話）というタームが用いられる。
- <sup>4</sup> 拙稿「高橋亨の『朝鮮の物語集』における朝鮮人論に関する研究」『学校教育学研究論集』24、東京学芸大学、2011年；李市竣・張庚男・金広植共編『高橋亨 朝鮮の物語集附俚諺』J&C、ソウル、2012年、を参照。
- <sup>5</sup> 植民地期に刊行された「日本語朝鮮説話集」については次の拙稿を参照。「近代における朝鮮説話集の刊行とその研究—田中梅吉の研究を手がかりにして—」（徐禎完・増尾伸一郎編『植民地朝鮮と帝国日本』勉誠出版、2010年）；「帝国日本における日本語朝鮮説話集の刊行とその推移に関する研究」東京学芸大学大学院博士論文、2012年（『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版、近刊予定）、などを参照。
- <sup>6</sup> \* 曹喜雄「日本語で書かれた韓国説話／韓国説話論」1、『語文学論叢』24輯、国民大学校、2005年、1-2頁。以下、韓国語文献には、\*印を付けて日本語文献との混同を避けることにする。
- <sup>7</sup> \* 権赫来「近代初期 説話・古典小説集『朝鮮の物語集』の性格と文学史的意義」『韓国言語文学』64、2008年、234頁。
- <sup>8</sup> 『日本民俗学大系』第1巻、平凡社、1960年、131-133頁。
- <sup>9</sup> 「植民地主義民俗学」をめぐる論争については、南根祐「『朝鮮民俗学』と植民地主義—今村鞆と村山智順—」（筑波大学民俗学研究会編『心意と信仰の民俗』吉川弘文館、2001年）を参照。
- <sup>10</sup> 植民地支配下での朝鮮研究は、究極的に支配を追認するものになりやすい時代状況の中で、無自覚的に「無関心」そのものだけを批判することは意味をなさないと筆者は考えているが、なぜ無関心であったのかについては、真摯な検討が求められる。
- <sup>11</sup> 田中と清水については拙稿、前掲論文、2010年；「グリム研究家田中梅吉と朝鮮民間伝承調査—朝鮮総督府編『朝鮮童話集』及び『児童絵本 小児画篇』を中心に—」（『昔話伝説研究』32、2013年；\*「清水兵三の朝鮮民謡・説話論に対する考察」『温知論叢』28輯、2011年、を参照。
- <sup>12</sup> 石井正己『植民地の昔話の採集と教育に関する基礎的研究』東京学芸大学報告書、2007年。

\*石井正己編、崔仁鶴訳『1923年 朝鮮説話集』民俗苑、2010年；拙稿「新義州高等普通学校作文集『大正十二年伝説集』に関する考察」（石井正己編『南洋群島の昔話と教育—植民地時代から国際化社会へ—』東京学芸大学報告書、2011年）を参照。

<sup>13</sup> 高木については、次の論文を参照。鈴木寛之『『郷土研究』創刊号と高木敏雄』『文学部論叢』81、熊本大学、2004年；山下欣一「高木敏雄」、瀬川清子他編『日本民俗学のエッセンス—日本民俗学の成立と展開—』ベリかん社、1979年；布村一夫「新しい日本神話学のために—比較神話学者・高木敏雄五〇年忌』『歴史評論』268、1972年；同『神話とマルクス』世界書院、1989年。

<sup>14</sup> 最も詳細な高木の年譜は次を参照。卯野木盈二編『高木敏雄初期論文集』上巻、共同体社、1976年。

<sup>15</sup> 飯倉照平編「南方熊楠・高木敏雄往復書簡」『熊楠研究』5号、2003年、257頁。

<sup>16</sup> 関敬吾「解説」、高木敏雄『童話の研究』講談社、1977年、213頁。

<sup>17</sup> 今の韓国では、前近代の漢籍に伝わる説話を「文献説話」、現在も民間で伝承される説話を「口伝説話」に二分するのが一般的であるが、これはあくまでも便宜的な側面が強く、共通の「説話」という枠組みの中から、両者の関わりに注目する研究が多い。本稿においても厳密に両者を分けるのではなく、その関わりに注目しているが、便宜上、用語の使い分けを行ったことをことわっておく。

<sup>18</sup> \*金広植・李市垞「高木敏雄の朝鮮民間伝承「朝鮮童話集」考察」（『日本研究』55号、韓国外国語大学校日本研究所、2013年）を参照。

<sup>19</sup> 高木敏雄『新日本教育昔噺』敬文館、1917年、1-2頁。

<sup>20</sup> 『読売新聞』1917年6月21日付の「忽再版 新日本教育昔噺」広告を参照。

<sup>21</sup> ドイツの教父エンスホフが報告した51篇の「朝鮮の話 Koreanische Erzählungen」は、ベルリンで刊行された『民俗学協会雑誌 Zeitschrift des Vereins für Volkskunde』21-22（1911～2年）に掲載された。

<sup>22</sup> 原宏「清水兵三」『島根県大百科事典』上巻、山陰中央新報社、1982年、817頁。

<sup>23</sup> 石井正己「郷土研究と出雲—清水兵三と高木敏雄・柳田国男—」『山陰民俗研究』14、2009年、4頁。

<sup>24</sup> 孫晋泰の比較研究については、復刻版『朝鮮民譚集』（勉誠出版、2009年）の解説（増尾伸一郎「孫晋泰の比較説話研究」）を参照。

<sup>25</sup> 野中正孝『東京外国語学校史』不二出版、2008年、540頁。

<sup>26</sup> 清水兵三「出雲と朝鮮—思い起こすままに—」『伝承』5号、山陰民俗学会、1960年9月、27頁。

<sup>27</sup> 清水兵三編『統営郡風水害誌』1934、統営郡庁（影印本『韓国地理風俗誌叢書 272 晋州案内 鎮海要覧 統営郡風水害誌』景仁文化社、1995年、337頁）。

<sup>28</sup> 「編輯室より」『朝鮮社会事業』5-4、1927年、42頁。

- <sup>29</sup> 市山盛雄編『朝鮮民謡の研究』坂本書店、1927年、2頁。
- <sup>30</sup> 青丘同人「民間伝承に現はれた朝鮮の社会相」『朝鮮社会事業』4-10、1926年、19頁。
- <sup>31</sup> 孫晋泰著作目録は、\*拙稿「孫晋泰の比較説話論考察—新資料の発掘と著作目録を中心に—」（『近代書誌』5、2012年）を参照。
- <sup>32</sup> 1926年当初は、時調に対して孫は朝鮮語での発音が同じであることもあり「時調」を「詩調」と捉えていたが、孫晋泰編の『朝鮮古歌謡集』（刀江書院、1929年）では「時調」になっている。それは『朝鮮古歌謡集』公刊における甚大なる助力者・前間恭作の教示によることが近年公開された\*『南滄孫晋泰先生遺稿集2我が国の民俗と歴史』（高麗大学校博物館、2002年）によって明らかになった。遺稿集には前間恭作の書簡が収録されているが、そこに前間は「[時] アップツーデートの義、即ち時流、時人、などいふ場合と同じく「当時」の意味で、つまり「近代風」という「流風の」の義に外ありませんまい。これをやれ「時季」だの「詩調」（これはまったく話にならぬ熟語で鳴沙の明沙の類です）だのといふ必要がありますか。今は御一考をお願いします」（129頁）と指摘している。
- <sup>33</sup> 清水兵三「朝鮮の郷土と民謡」（市山盛雄編、前掲書、1927年、125頁）。清水の朝鮮民謡・童謡論は\*拙稿、前掲論文、2011年を参照。
- <sup>34</sup> 石井正己、前掲論文、2009年、5頁。
- <sup>35</sup> 清水兵三「朝鮮物語の研究」『朝鮮彙報』1916年1月号、146頁。
- <sup>36</sup> 高木敏雄、前掲論文、1912年、235頁。
- <sup>37</sup> 田島泰秀『温突夜話』教育普成株式会社、1923年、30-32頁。
- <sup>38</sup> \*韓国精神文化研究院『韓国口碑文学大系』6-10、7-4、8-2、8-10に収録。
- <sup>39</sup> \*金鉉龍『韓国文献説話』7、建国大学校出版部、2000年、246-248頁。「鼠の嫁入り」の比較研究は、立石展大『日中民間説話の比較研究』汲古書院、2013年を参照。
- <sup>40</sup> 「朝鮮民間説話の研究」は、朝鮮を中心とした東アジア比較説話論の決定版であり、1920年代における驚きの研究成果であった。しかし、高木敏雄と同じく早過ぎた孫の比較説話論が単行本になるのは20年後のことであった。若い時期の渾身の力作をそのまま上梓したのが『朝鮮民族説話の研究』であった。詳細は、拙稿「孫晋泰の東アジア民間説話論の可能性」、前掲論文、2013年、を参照。
- <sup>41</sup> それぞれの概要は、増尾伸一郎「孫晋泰『朝鮮民譚集』の方法」（石井正己編『韓国と日本をむすぶ昔話』東京学芸大学報告書、2010年）を参照。
- <sup>42</sup> \*孫晋泰「朝鮮民間説話の研究」10、『新民』38号、1928年、64頁。
- <sup>43</sup> \*孫晋泰「朝鮮民間説話の研究」9、『新民』37号、1928年、30頁。
- <sup>44</sup> 石井正己、前掲論文、2009年、7頁。
- <sup>45</sup> 大島建彦『日本の昔話と伝説』三弥井書店、2004年、64-65頁。東アジアをめぐる「古屋の漏」については、増尾伸一郎「女の屍に乗る男—『今昔物語集』の怪異譚と昔話「古屋の漏り」をめぐる—」（『アジア遊学』79、2005年9月、勉誠出版）；立石展大『日中民間説話の比

較研究』汲古書院、2013年、などを参照。

<sup>46</sup> \* 黄仁徳「孫晋泰の口碑文学研究」『口碑文学研究』2号、1995年、314頁。

新刊紹介

林采完ほか著

『コリアンのディアスポラ - 移住ルートと記憶 -』

国際移住機関(IOM: International Organization for Migration)によると、地球上に自分の母国ではない所に住んでいる人は、約21,400万人を超えているという。すなわち、世界人口で計算すると33人の中で1人がこれに当たるといえる。この人々は移民、労働、亡命、結婚、留学など様々な目的のために自発的でも他意的にも母国から離れ、新たな定着地で絶え間なく、葛藤と適応過程の中で生きている。これは現在がグローバル時代であるということを証明してくれることでもある。このように移住する人々は、最近「ディアスポラ(Diaspora)」という概念を借用し、世界的に活発な研究が行われている。ディアスポラとは、「撒き散らされたもの」という意味のギリシャ語に由来する言葉で、元の国家や民族の居住地を離れて暮らす国民や民族の集団ないしコミュニティ、またはそのように離散すること自体を指す。このディアスポラは、グローバル化の主体として評価され、ディアスポラを媒介としてますます国家間、民族間の閉じた壁が崩れている中で、人類は徐々に世界主義的な普遍性と特殊性が相互に衝突する様相が展開されている。

『コリアンのディアスポラ - 移住ルートと記憶 -』というこの本は、韓国全南大学の世

界韓商文化研究団から出版された本である。この研究団は、近現代東北アジアのディアスポラ共同体の歴史的・文化人類学的研究を通じて、離散の経路と文化領域を学問的に再現することに焦点を置いている。また、ディアスポラ(日中韓)の分散過程で形成されたディアスポラの移住ルートを系譜学(系図学)の観点から、地図化し、移住過程で形成された彼らの経験と記憶を「個別的な記憶」、「集団的な記憶と領土の再構築」、「文化の再構成」という三つの観点から研究した本である。そして今まで移民などの移住に関する人々をディアスポラという概念で定義し、韓国人という民族的な概念を乗り越えて、中国の朝鮮族、ロシアの沿海州高麗人、在日コリアン、サハリンの韓人などを中心に分析し、彼らの移住の経験と記憶を自分たちのライフヒストリーの調査で検証している。『コリアンディアスポラ』を発行した「全南大学世界韓商文化研究団」は、2003年に設立された在外韓国人の研究機関として『コリアンのディアスポラ』をはじめ、『華僑のディアスポラ』、『日系人のディアスポラ』など、日中韓のディアスポラについて総合的に分析する研究書を発行している。

(李徳雨)

ブックコリア 2013年 239頁